

吉田茂の妻・雪子 平和への思い

鷹野 真子（当館学芸員）

一 はじめに

内閣総理大臣を五度務め、戦後の日本の復興を担った吉田茂は、戦前にはおよそ二十年の間、外交官として中国やヨーロッパへと赴き、太平洋戦争勃発前の不安定な世界情勢の中でその任に就いた。その外交官としての吉田を支えたのが、吉田の妻・雪子であった。語学堪能、社交的で外国人の友人も多い雪子は、まさに理想的な外交官夫人であった。他方で、文化・芸術面においても活動をしており、歌人としては佐佐木信綱に師事し、日本人としての教養も十分に身に付けていた人物である。

また、戦中においても新英米派の中心的人物であった牧野伸顕（一八六一・一九四九）を父にもつ雪子は、その父の影響もあり、殊に親英的な一面があった。ゆえに、外交官夫人という立場から国際情勢を見、日英関係の悪化や、日本の行く末を憂い、案じ続けた。

本稿では、令和五年度旧吉田茂邸ミニパネル展示「吉田茂の妻・雪子 国際人として、歌人として」の内容を踏まえ、吉田雪子について紹介するとともに、展示では紹介しきれなかった平和への思いを紐解いていく。激動ともいえるべき世界情勢の中で、外交官である夫を支えた雪子。その人物像について、改めて考えてみたい。

二 雪子の生い立ち

雪子は、明治二十二年（一八八九）、父・牧野伸顕と母・峰子の長女とし

て生まれた。父・牧野伸顕は、維新の三傑の一人である大久保利通の次男で、外交官および、文部大臣、農商務大臣、外務大臣などを務めた政治家であり、更には昭和天皇の側近を務めた人物である。明治四年（一九七二）、伸顕は十歳にして岩倉遣欧使節団に随行し、アメリカに三年間留学している。雪子が生まれた年には、イタリアで公使館書記官として勤務していた。母・峰子は明治期に山形県令、福島県令、栃木県令などを務め、積極的に地域開発を進めるその手法から「土木県令」とも呼ばれた三島通庸の次女である。詞や和歌の才能に優れた人物であった。

父・伸顕は明治三十年（一八九七）にイタリア公使、翌年にオーストリア公使に任じられた。雪子もこれに同行してローマ、ウィーンで暮らしたため、吉田と結婚する以前から欧州での生活経験を身に付けており、語学も堪能であった。雪子の外交官夫人としての素養は、外交官を父に持つ家系に依るところが大きいといえよう。

三 吉田との結婚

明治四十二年（一九〇九）、雪子は当時駆け出しの外交官であった吉田茂と結婚した。雪子は十九歳、茂は三十一歳であった。

牧野家の長女である雪子との結婚で、吉田は政界や外交に発言権のある牧野伸顕を後ろ盾に得ることができた。吉田は外交官として、最初は奉天、次いでイギリス、ロンドンに赴任するが、その後はしばらく中国での外交官生活が続いた。当時の外交官は、欧米諸国での勤務が出世街道であった。この道を外れていた吉田は、その状況を打開するため、牧野に対して獵官運動を行なった。牧野に頼み込み、大正八年（一九一九）のパリ講和会議

に、日本の全権大使である牧野の秘書官として随行した。その後の吉田は、昭和三年（一九二八）から二年間、田中義一内閣および浜口雄幸内閣で外務次官を、昭和五年（一九三〇）に駐伊大使、昭和十一年（一九三六）に駐英大使と、外交官としての出世街道を歩んだ。

余談ではあるが、吉田夫妻の披露宴は、華族会館（現在の霞会館）で行なわれた。しかし、そこに新郎である吉田の姿はなかった。というのも、このとき吉田は痔の悪化で入院していたため、出席が叶わなかったのだ。その吉田の代わりに鎮座していたのは、なんと吉田の実父・竹内綱が吉田に贈った「兼定」という刀であった。雪子夫人にとって、忘れることのできない披露宴だったに違いない。

四 外交官夫人として

吉田と結婚した雪子は、外交官の妻として吉田に随行した。はじめは、結婚当時ロンドン勤務を任ぜられていた吉田と共に渡英。この渡英前、父・伸顕は「ロンドンでは、絹に包まれて靴にしまわれた真珠のようだ。その輝きはすぐにはわからないけれど、長くいればいるほどわかってくる」^①と雪子に言い聞かせたという。父からの助言により、雪子は渡英前からイギリスに対して好感を持ち、その後も彼女の親英的な面を形成させていった。次いで同年十二月には大使館三等書記官に任ぜられた吉田とともにイタリアへ、大正元年（一九一二）からは、吉田が安東領事に命ぜられたことで、中国へ随行した。この後、中国での任は昭和三年（一九二八）まで続き、先に述べたように吉田が猟官運動を行なうに至ったのである。

欧州での生活経験があり、外国語ができた雪子には多くの友人がいた。

雪子はパーティーに招待をされたり、あるいは雪子から招待をしたりと、吉田の赴任先では外交官夫人としての交友を深めた。また、非常に努力家な一面もあったようで、外国語の発音をより完璧なものにするために語学の先生に付いて勉強をしていたという。

ところで、雪子は熱心なカトリック信者であった。そのため、吉田が駐伊大使をしていた頃には、カトリックの修道女とも交友があった。昭和八年（一九三三）、吉田が待命で帰国をした際に、日本に宗教教育や情操教育を行なう学校を建てようとした修道女たちが雪子を頼って来日する。彼女らは雪子の協力を得て、昭和十年（一九三五）に清泉寮（現・清泉女子大学の前身）を設立した。この清泉寮について、雪子は、外国語を十分に教え込むだけではなく、日本固有の文化についても教養を高め、国際的に恥ずかしくない女性を送り出すための場所としての機能を想定していたようだ。

さて、昭和十二年（一九三七）、北京郊外での盧溝橋事件を端とする日中戦争がはじまった。吉田が駐英大使となつて二年目の出来事である。日中関係の悪化は、同時に日英間の関係にも影響を及ぼしたことは言うまでもない。そのような中、吉田に随行して渡英した雪子は、イギリスでの出来事を英文の随筆集としてまとめた。この随筆集は『Whispering Leaves in Grovesner Square 1936- 37』と題され、昭和十三年（一九三八）にイギリスで出版された。この随筆集をイギリスで出版した雪子には、当時、目を追って悪化していく日英関係をどうにか良い方向にもっていくことはできないかという思いがあった。自身の行動がイギリスと日本の架け橋になることを願っていたようだ。

五 「滯英雜記」にみる雪子の思い

昭和十三年（一九三八）九月、吉田に帰朝命令が下る。これにともない雪子も日本に戻った。久しぶりに帰国した雪子の目には、当時の日本がどのように映ったのか。

雪子は、『婦人之友』昭和十三年十一月号に「滯英雜記」^②という題で、イギリスでの思い出や、世界情勢に対する心情などを寄稿している。これによると、二年五ヶ月ぶりに帰った日本は、「絶えず進歩して来た日本が、東京が、その動きを暫く停止させてゐる」ような印象を受けたそうだ。「タクシーなどが少くなつたせいとか、街の様子なども何となく淋しく、行き交ふ人々の表情にも緊張と憂ひの色が濃くあらはれてゐるやうに見受けられ、今更に国を挙げて重大時局に直面してゐることを、感ぜずにはゐられなかつた」。しかし、しばらくするとその空気にも慣れはじめ、「周囲の人々をみても、たゞ緊張してゐるといふより、まだまだ余裕をもつて生活してゐる、むしろ、自分々々の生活に安んじてゐる人の多いことにも気づいて」きたという。

ただし、雪子はどうした日本の空気を決して良いこととしては捉えなかつた。「もし国民が皇軍の輝かしい勝利の方面しか知らないために安心したり楽な気持ちになつてゐるのであつたら、それは却つて危険なことではないかと思つた」というように、むしろ危機感を抱かずにいられなかつたようだ。先にも述べたように、雪子が外交官夫人としてイギリスに滞在していたのは、日中戦争がはじまり、日英関係が日を追つて悪化していったときである。そのような中で、海の外から日本を見てきたこと、滯英中も「朝

に夕に伝へられる内外の新聞やニュースなどを通して故国を思ひ、夜も眠られないことが度々」であつた雪子だからこそ感じるものであつた。

雪子のそうした思いは、同時に使命感になつたようだ。「日本の正義、日本の主張を知つてもらふためにどうしたらよいのか、日本人である私ども一人々々が、身をもつて、その正しさをあらはさなければならない」こと、そして、海外における日本の本当の情勢を国民が知ることは「決して危険なことではなく、却つて愛国心を増すこと」、そして「そこから生れた本当の安心、本当の余裕をもつて生活することが、何よりも力強いこと」であると信じた。

雪子はこの「滯英雜記」で、イギリスの人々と接した中で印象的であつた体験を紹介している。いずれの体験も、英国の人々が雪子たちのことを決して敵対している日本人としてではなく、一人の人間として接してくれたことを回想するものである。雪子は、そうした体験から、英国の人々が、教養が高く、見識があり、何より真実を尊ぶことを高く評価していた。そして、同時に雪子自身もそうした生き方・考え方を重んじていたであらうことが、清泉寮に求めた姿や、日本国民が世界における日本の本当の情勢を知るべきであるという考えを持つていたことから窺えよう。

六 晩年

昭和十六年（一九四一）五月、雪子は東京大塚の癌研究所附属病院で乳癌と診断される。病床の雪子を見舞つた人々の中に、アメリカ駐日大使であるジョセフ・グルーとその夫人アリス、娘のエルシーがいた。グルーは、日米開戦を阻止しようと奔走した一人である。ゆえに、吉田とグルーは、

家族ぐるみでの付き合いがあった。

また、アリスにとって、雪子はいちばん親しい日本人であった。アリスは吉田や次女の和子が雪子を病院へ見舞う際、ガソリン規制で個人の自動車を使用できなかった吉田らに対して米国大使館の車を週に二、三回出すなど、日米関係が悪化する中でも協力を惜しまず、むしろ献身した。雪子の癌が喉頭まで転移してからも、アリスは雪子のためにスープを作った。最期の数週間はアリスの作るスープしか喉を通らなかったそうだ。見舞ったアリス夫人に対し、「自分はもう先が短いからこんなにしてもらうともしたくない。ほかの人にしてあげてほしい」と伝えている。癌と診断されたその年の十月七日、雪子は五十二歳で亡くなった。

七 おわりに

雪子の葬儀は、昭和十六年十月に小石川区（現・文京区）のカトリック関口教会にて行われた。雪子が亡くなった二日後に、葬儀を知らせる新聞広告が吉田の名で出されるが、末尾には「尚時節柄御供物等は御辞退申上候」⁽³⁾とあり、この年の十二月に開戦する太平洋戦争が目前まで迫っていることを予感させる。

外交官夫人としてヨーロッパに滞在する中、そして帰国し病床に臥す中で、暗雲の立ち込める世界情勢に対し、雪子の後生は胸を痛めることも多かったに違いない。ジョセフ・グルーは、雪子を「奥様はいかなる地であっても最高にして最良の品性そのものとされる方でした」⁽⁴⁾と評する。こうした評価は、雪子の努力により身に付いた教養と、彼女の人柄によるものであろう。

戦時期、吉田は和平工作に奔走したことで知られているが、その夫人である雪子も、自身の立場から平和を強く願い、行動をしていたといえよう。世相に流されることなく、信念をもって歩んだ人生は、語学・教養や人柄と併せて、外交官夫人としての評価をより強固なものにしていると感ぜざるを得ない。

注

- (1) 麻生和子『父・吉田茂』新潮文庫、二〇一二年、一三五頁
- (2) 『婦人之友』婦人之友社、一九三八年十二月
- (3) 朝日新聞 一九四一年十月九日 東京朝刊
- (4) 五百旗頭真「吉田茂とジョセフ・グルー」財団法人吉田茂記念事業財団編『人間 吉田茂』（中央公論社、一九九一年）収録

参考文献

- ・吉田茂『世界と日本』番町書房、一九六三年
- ・牧野伸顕『回顧録（上）』中公文庫、一九七七年
- ・牧野伸顕『回顧録（下）』中公文庫、一九七八年
- ・財団法人吉田茂記念事業財団『人間 吉田茂』中央公論社、一九九一年
- ・麻生和子『父 吉田茂』光文社、一九九三年
- ・吉田雪子著・長岡祥三編訳『ジョージ六世戴冠式と秩父宮 グローヴナール・スクエアの木の葉の囁き』新人物往来社、一九九六年
- ・吉田暁子『父 吉田健一』河出書房新社、二〇一三年
- ・吉田健一『父のこと』中央公論新社、二〇一七年

年 報

令和 5 年度

◇ 大磯町郷土資料館年報 第 36 号

◇ 令和 6 年 9 月 4 日発行

◇ 編集・発行

大磯町郷土資料館

〒255-0005 神奈川県中郡大磯町西小磯 446-1

TEL 0463(61)4700 FAX 0463(61)4660